

# タイを旅行して考えた

姫 宮 利 融

2001. 1. 15

9月10日から14日までタイに旅行してきた。タイのバンコックを訪れたのは、恩師のU先生がチュラロンコーン大学の工学部・金属工学科に客員教授として赴任しているためで、特別講義を2コマ行った。従って、本報告ではチュラロンコーン大学で体験した範囲の様子について報告し、合わせて街の様子など紹介したい。

## チュラロンコーン大学……『王様と私』の皇太子の名前のついた大学

タイというと、映画『王様と私』や新しいものでは『アンナと王様』（ジョディ・フォスター主演）で知られているが、前者はタイの人が見たら烈火のごとく怒り出しそうな内容だし、後者は現代化し過ぎて人物像が「近代主義的」に歪曲されていると言える。それはともかくチュラロンコーンという名前はその中に「皇太子」として登場する Rama 5 世で、タイの近代のインフラはこの王の時代に出来たと言われている。ほぼ150年前の時代である。

チュラロンコーン大学はいくつもの学部を有する総合大学で、バンコック市内の中心部に北大本部キャンパスより大きいと思われるキャンパスを有し、その周辺のホテル・デパート等として使われている土地もチュラロンコーン大学の敷地であるから、黙っていても地代が入ってくる仕組みである。

大学の授業は午前8時より始まるらしく、8時10分頃キャンパスを歩くと、既に教室で授業が行われている様子が見られた。妻が聞いた話だが、チュラロンコーン大学は、1・2年生は制服を着用しなければならないという規則があるらしい。私の観察と照らし合わせてみると、制服とは、男子は黒の長ズボンと白の半袖Yシャツ、女子は黒のロングスカート（スリットつき）と白の半袖Yシャツというものらしい。ミニスカートの女子学生、職員も見かけたが、さすがに、男の短パンはいない。

高等教育進学率が低く、その中でチュラロンコーン大学が「名門」であることから、大学全体は「国家エリート養成期間」として機能しているらしく、個人の自発性という点からちょっと隔世の感を得た。

## 「3元合金系の凝固組織の予測」特別講義

9月12日、午前、上記の題目の講演を行った。参加者は、大学院修士の学生と学外からの参加を含めて20名弱であった。「Ladies and gentlemen」で始めようとするとき、女性の参加者が何名いるか心配したが、4名いた。内容は、「研究の目的、バックグラウンド」「J/Hモデルの検討」「3元系への拡張」（この部分は私のオリジナル）と言うもので、各30分くらいしゃべった。英

語で、英語のOHPを使って説明したが、教員の Dr. Ittipon がタイ語で概要を説明したので、主旨は伝わったと思う。

この講演の最後にチュラロンコーン大学の記念のメダルをもらった。

## LAN/UNIX のこと

私がチュラロンコーン大学から「招待」を受けた事項の1つは、先に述べた「共晶合金の凝固モデル」について講演することであったが、もうひとつは、「LAN/UNIX」について入門的な知識を伝えることであった。私は稚内北星大学で「ネットワーク・プログラミング」という授業を受け持っており、また、短大2年生に対して「UNIX システムコール」の授業を行っている。これらの授業で仕込んでいる知識と「サマースクール」で準備したものを中心に OHP を作って準備しておいた。

11日にU先生から、チュラロンコーン大学工学部の様子をお聞きして、「LAN が欲しい」ということを伺った。実際には、工学部全体の LAN は Linux ベースで動いているが、金属工学科の各研究室の PC はスタンドアロンで動いていて工学部 LAN とつながっておらず、フロッピーでデータ交換しているらしい。12日の午後、4人（日本へ留学した経験のあるチュラロンコーン大学の教員、日本人の留学生、タイ人の修士学生、U先生）を相手に円卓を囲んで、「UNIX の歴史・特徴」「情報と資源の共有」「ネットワーク」について話した。IP を取得して金属工学科でミニ LAN を作って工学部全体の LAN につなぐという構想が出てきた。

## ゲストハウスのことなど

バンコックではチュラロンコーン大学のゲストハウスに宿泊した。私の泊まったゲストハウスは「ウィッタニウェース」と言い、警備、フロント業務は24時間行われている。ベッド・メイクは毎日行われ、1日2本（500ml×2本）のミネラル・ウォーターが提供された。各室にシャワーとトイレが付いていて、ランドリー・サービスがあった。ウィッタニウェースには食堂はついていないが、1階のラウンジに売店があって、日中は飲物などを購入することが出来る。

実は、ゲストハウスはウィッタニウェース以外にもいくつかあって、隣の「ササ・インターナショナル・ハウス」には1階にレストランが付いている。U先生が JICA でタイを訪問したときは、ササに泊まったとのことであった。

## バンコック市内の様子

バンコック市内中心部の道路は道幅は広いが、車は車線を見ずに90キロ位のスピードで走っている。道を渡るのも、交通信号を守ろうという気持ちは誰も持っていないので、様子をうかがいながら渡ることになる。

タイは物価が安く、1バーツ=2.6円のレートで30バーツで昼食が食べられる（学食だと20バーツ）。

ツで収まる) し、タクシーも安く、街中だと50バーツ位で移動できる。

バンコック中心部から空港まで(100キロのスピードで4、50分)走って、ハイウェイを使って300バーツである。タクシーは“TAXI-METER”と表示してあるのはメーター制だが、交渉で値段を決めることもあり、ツクツク(三輪タクシー)は交渉である。

繁華街はいろいろな商品が溢れているが、日本のデパートも進出しており、SOGOでは売子がやる気なさそうに「投売り」をしていた。

街のあちこちに仏像を祀っているところがあり、奉納用の花が売られていた。SOGOの近くの四面仏では踊りが奉納されていたが、ショー付のレストランで見ると違って、こちらの方が生活に根付いたものなのであろう。

## 昔からの友人との食事

9月12日夜、MTEC(金属材料技術研究所)の所長である、Dr. Paritudの招待で、私たちとU先生夫妻、U先生の秘書さん、Dr. Ittipon, Dr. Suvanchai(チュラロンコーン大学教員)、女子学生2人、MTECのPerakid氏(U先生の研究室の卒業生)で食事をした。Dr. Paritudは大学院では私の2年先輩に当たる。(年令は私の方が上だが。)U先生の秘書さんが、日本からのみやげ(自作の絵はがきと土鈴)を私がチュラロンコーン大学の部屋に置き忘れたのを気をきかして持ってきてくれたので、参加者に配る事が出来た。

日本に留学した人が多いので、話題は自然と日本と日本の大学への留学のことになった。Ittipon氏の研究室のマスターを春に卒業した女子学生Aさんが9月末から東京大学に留学することから、私が「ナンパには気をつけるように。」と言うと、Suvanchai氏が、「それはもう説明してある。今、特に気をつけなければいけない場所を教えよ。」と言うので、最近の東京事情に疎い私は困ってしまった。

Paritud氏は仕事が長びいたらしく、遅れて現れた。私は、秘書さんのおかげで、D論(簡易整本版)を渡すことができた。彼から私たち夫婦へのプレゼントは、ネクタイとスカーフであるが、技術研究所の「公式商品」らしく、ネクタイには歯車や集積回路の絵が入っている。どうやら、日本でも私を「歩く広告塔」にするつもりらしい。

## タイの食事……口の中で味をつくるのは日本だけか？

日本ではタイ料理というと、「タイスキ」と呼ばれているタイ式しゃぶしゃぶが比較的によく知られているようである。パック旅行のコースにも必ず入っているようだが、日本人好みする食事の形態だからだと思う。

タイの食事は、ご飯(インディカ米)の皿の上におかずを取り、左手のフォークでご飯と混ぜ合わせてあらかじめ味をつくり、右手のスプーンで口に配ぶ。このとき、皿を持ち上げてはならない。なるほど、この食事のしかたならインディカ米が適合していてジャポニカ米は向かないだろうと納得した。おかずの中には玄妙な香草、香辛料が使われており、後味は甘くなってくる。

日本では、ご飯だけ、ある一種類のおかずだけ食べるのは、「だけ食い」と言って子どもの時に行儀悪くやってはいけないこととしてしつけられ、自然に「口の中で味をつくる」ことが習慣になっている。もちろん、懐石料理のように一品ずつ食べる食事も例外的にあるが。しかし世界的に見るとこれは特殊なことだろう。また、日本では、お茶碗、お椀を左手で持つように子供の時にしつけられるが、タイでごはんの皿を持ち上げるのは御法度である。韓国でも食器を持ち上げてはならないと聞いている。

「日本特殊論」を主張するわけではないが、食事の形態とごはん（インディカ米、ジャポニカ米）が密接に結びついていることを納得したことは文化的収穫の一つだった。

## チェンマイへの旅

9月13日、14日は Paritud 氏のプレゼントでチェンマイへ旅行した。バンコクーチェンマイ間の航空切符を渡され、チェンマイで日本語ガイドが待ちうけているというシステムである。チェンマイはタイの王朝が最初にできた土地でタイで2番目に大きな都市であるが、バンコクが500万以上の人口であるのに対し、16万人の人口である。

チェンマイでは、ガイドさんの案内で、寺院、みやげ物工場（ISO9002認定）、ナイト・バザール、象の牧場などを見て回った。印象深かったのは、寺院の建物と、ナイト・バザールで「バッチもん」を売っていた様子だろうか。バンコクでは女性のオートバイ乗りは見かけなかったが、チェンマイではミニスカの女性がスーパー・カブに乗って80キロくらいのスピードで走り回っていた。ホンダが世界企業になった理由が納得できたというものである。

## タイ／日本、共同性と近代化

寺院を訪問したのが主にチェンマイだったということもあって、チェンマイの感想の続きになるが、仏教はタイでは生活に密着したものである。

日本と同じように、有名な寺院の前にはみやげ物屋が「門前町」を形成しているが、考え方としては、参拝客相手の商売であるとともに、「仏の功德」を分けてもらって生活するというところだろう。

寺院の境内には「小鳥を売る」少女がいた。身振りで示すところによると、1羽が10バーツ、2羽が20バーツで、それぞれ1羽あるいは2羽ずつお盆の上に籠で伏せてある。10バーツあるいは20バーツを支払って籠を取って鳥を放つシステムである。物の本で読んで知っていたが、実際にこの種の「モノ売り」を見たのははじめてであった。もちろん、鳥を放つことによって「功德を積む」という考えである。「あんたが（知合いのオニイさんかもしれないが）小鳥を捕まえなければいいんだろう」という突っ込みは別にして、このことによって社会的には所得の移転が行われるわけである。

寺院はまた、学校や孤児院を運営しているところが多く、（お寺さんが学校を運営することは日本でも広く見られるところであるが）社会的公共性のベースラインを維持する機能があると見

えた。したがって、寺院を訪問した際に献金することはわずかの金額であっても社会的に意味のあることだろう。

仏教が生活に密着しているというのは、釈迦の周りに集まった弟子たちがお互いのつながりを信じたように、人々がお互いのつながりを信じているということである。

タイの仏教と日本の仏教は、南方仏教、北方仏教の違いとして説明されることが多いが、個人相互の共同性＝人と人とのつながりを形づくるシステムとしてはそんなに変わらないものだと思う。日本でもこの種のシステムは（その功罪は別として）かつては大きな力を持ち、今でも日本社会に大きな影響力をもっている。表層の文化現象に目をとられると、見えなくなってしまうものかもしれない。